

ABIC 国際社会貢献センター

Information Letter

No. 45 2016年3月

| | | |
|-------------------|---------------------------------------|----|
| 政府機関関連への協力 | 国際交流基金とABICの共同事業に参加して | 2 |
| 自治体・中小企業支援 | 優れた人、商品、会社の海外飛翔のお手伝い、初めの一歩 | 3 |
| | 愛媛県食品・食材販路開拓事業に携わって | 4 |
| | 青森の食材を世界へ! | 5 |
| 教育 | 東京外国語大学「社会・国際貢献情報センター」とABICの連携について | 6 |
| | 14年目を迎える国際社会貢献センターによる大学講義「グローバル経済Ⅰ・Ⅱ」 | 7 |
| | 高等学校における国際理解教育 | 8 |
| 留学生支援 | 世界に広がる生け花の輪 | 9 |
| エッセー | 笑いヨガを働く人々へ | 10 |
| | スペイン・奈良の弓道交流 | 11 |
| | 会員の種類 | 12 |
| | 法人・個人正会員／賛助会員一覧、活動会員数 | 12 |
| | 賛助会員入会のお祝い | 12 |

特定非営利活動法人 国際社会貢献センター (ABIC)
Action for a Better International Community

<http://www.abic.or.jp>

〒105-6123 東京都港区浜松町2-4-1
世界貿易センタービル23階
Tel : 03-3435-5973 Fax : 03-3435-5970
e-mail : mail@abic.or.jp

【関西デスク】
〒541-0053 大阪市中央区本町4-4-24 住友生命本町第2ビル9階
Tel & Fax : 06-6226-7955
e-mail : kansai-desk@abic.or.jp

政府機関関連への協力

国際交流基金とABICの共同事業に参加して

まなべ 真鍋 忠夫 (元丸紅)

ABICの2015年度の重要目標の一つが国際交流基金との共同プロジェクトの立ち上げと2016年度以降への継続ということであり、本年度（2015年度）2件のプロジェクトが具体化されたが、その両プロジェクトに私が参加できたのは非常に光栄であった。

1) 最初のプロジェクトは、リードアジア2015アジア人材育成プログラムである。8月16日～24日、東京で行われた。国際交流基金の支援の下、「これまで日中交流になじみのなかった学生に、日中交流の楽しさ、意義を知ってもらう」ことを目的に共同生活を行いながら企業訪問、文化交流を通じて友好を深める事業であり、日中の大学生各21人が参加した。

私は初日の基調講演を行った。テーマは「グローバル社会のなかで生き抜く人材とはどういう人材で、どういう知見、マナー等を身につける必要があるか」「企業の海外進出の具体例」「企業訪問に際してのアドバイス」であり、実例・経験を交え分かりやすく説明した。海外に何回行ったとか何年住んだとかではなく、どれだけ深く現地の人と交流して現地の事情を体得するかが重要であるということ。日本企業もいろいろ課題はあるが、海外との関係は切っても切れない関係であり、中長期的に人材を育成し海外戦略を考えていく必要がある。会社訪問に際しても経営者、またそこに働く従業員たちがいずれもお互いきちっと意思疎通をしながら、中長期的な視野で将来を語っているかをよく見てほしいと話した。大手企業と中小企業につきそれぞれの違いと特徴についても説明した。

2) 2番目のプロジェクトは、国際交流基金が中国各地で展開する「ふれあい広場」というプラットフォームを通じた日本企業文化セミナーである。中国浙江省で杭州市は11月7日、嘉興市は11月8日にそれぞれ周辺地域の大学生・教師を中心とした人たちを対象にセミナーを行った。講師は、私の他は現地日本企業の商工会の会長を務める企業の総経理（杭州市では杭州神鋼建設機械有限公司の田川氏、嘉興市では嘉興JFE



講演する筆者

精密鋼管有限公司の青柳氏) それに留学終了後日本で星野リゾートに就職した中国人閻氏の3人であった。

私のテーマは上記1)と同様の「グローバル人材とは」に加え、「日本企業の必要とする人材」「日本企業の課題」「国際コンソーシアムの実例」であった。現地企業の総経理の方々も非常に友好的で現地の学生に勇気を与えるような講演をされ、本セミナーは好評であった。私からは特に中国の大学生は賃金とか待遇で企業の良しあしを決める風潮もあるやに見受けられるが、ぜひ自分の目標をしっかりと持ち、グローバルな観点で物事を見て、実社会で活躍し貢献してもらいたいと強調した。

最後に、1)のリードアジアのプログラムに参加した浙江工商大学の学生2人と、2)のセミナーの場で再会したが、彼らが率先してセミナーの受け入れの窓口をしてくれ、本セミナーが成功するよう、いろいろな手配をしてくれたことを付け加えたい。つまりリードアジア、ふれあい広場のセミナーがばらばらのイベントとしてではなく、一つの流れとして日中の底辺の交流に貢献したことを感じた次第である。本事業が長く継続し日中友好の底辺を底上げできることを祈念する。



杭州の会場となった浙江工商大学



嘉興職業技術学院での質疑応答の様子

優れた人、商品、会社の海外飛翔のお手伝い、初めの一步

横浜市中小企業海外市場開拓支援アドバイザー **こちや じゅん** 古知屋 順 (元 日立ハイテクノロジーズ)

ABICの活動では、私はこれまで東京都中小企業振興公社での海外販路ナビゲーターを4年間務めさせていただいた。2015年8月からは、ABICが横浜市から継続して受託している「中小企業海外販路開拓事業支援」アドバイザーに採用されて、鶴見にある無人搬送ロボットAGV (automatic guided vehicle) に使われる主要部品を作っている(株)ワコー技研の海外進出のお手伝いを始めた。

これは「始めました」という報告で、成功例ではないが紹介させていただく。

AGVは無人の台車が工場等の中をマグネチックテープに沿って走り、止まる搬送ロボットである。昔の製造ラインに代わって現在はAGVが部品、材料を作業者のスポットに届けて、仕事が終わった物を次の作業者に送ることで、少量多品種生産に対応する会社が増えている。これは同時に個人の生産能力、実績を明確に表すものでもある。自動車のように重い物を扱う工場では、特にAGVがフォークリフトに代わって経済効率も上げることができる。

ワコー技研はAGVの動きを確実(ミリメートル以下の再帰精度)、強力(耐荷重数トン)にするハイエンド部品を作ることで工場内部に新しいメリットを作り出して、さらにそれをサーボ化によって安価に実現することで海外に市場を広げたいと考えている。日本市場ではその対象セグメントユーザーにはほぼ全て使われており、今後は海外市場での需要掘り起こしを希望している。

対象市場は、自動車等重量部材を取り扱って少量多品種を、速度を上げて生産する必要のある所、しかも人手不足、賃金上昇を余儀なくされている所、となるとASEAN内部で最大の自動車生産国で失業率1%以下のタイ国を最初のターゲットに絞った。

対象企業は、物作り能力と、主要顧客と仮定した自動車関連企業の生産現場に入り込んで改良、改善を提案する能力を有すること、健全経営は言うまでもないが、お客さま、パートナーとして誠実に一步一步お付き合いのすることも重要だと考えた。AGV製造、組み立てのノウハウは、部品を買っていただいたパートナーにはワコー技研が提供する。

私のタイトルはアドバイザー、でも実態は企業に商品、技術を教えていただけてびっくり感心しているところで、どのようなアドバイスができるかまだ試行錯誤の連続だが、幸運なことに今は支援企業と全く同じ希望を持っており、自分の違った経歴、職歴や海外勤務23年の経験を活用しながら種々ご提案している。

対象企業、お客さま候補の選出もタイ国の場合は日本国内に対象国の金融機関、経済協力団体があって、ありがたいことにいろいろ具体的に情報、マッチングなどを頂いている。

先日初めて現地に出向いて10社ほどに訪問紹介することができたが、先方の反応は極めて積極的で前向きであった。

今は次の段階に向けて、われわれの具体的な希望を明確にして先方の企業の希望に合うものにできるか、すり合わせを計画している。

アドバイスする人間から見ると、まず優れた人、商品、会社ありきで、そのコラボレーションでなければうまくいかない実感している。その上でわれわれの強さも弱さも十分に再検討して、ある程度はコラボレーションの相手にも理解してもらった上で、顧客、生産者、技術の提供者という関係に基づいて構造的な補完関係のあるパートナー探しをしていきたいと考えている。



会議室でデモ



写真、ビデオ撮影も許可

自治体・中小企業支援

愛媛県食品・食材販路開拓事業に携わって

ちはら ながみ
千原 長美 (元丸紅)

本題に入る前にABICと小生との関わりについて、簡単に述べておきたい。15年前に商社を定年退職後、ABICの活動を知り直ちに入会、現在に至っている。この間、私の専門が食品・水産であったこともあり、アジア諸国へ何度か出張し対日輸出促進のための講演や品質管理の指導等行ってきた。国内では各大学や教育センターで「世界と日本の食料事情／水産事情」・「マグロの話」・「エビの話」等いろいろと講義をさせていただいた。

さて本題であるが、愛媛県より首都圏販路開拓事業を受託したABICから委嘱を受けた6人のコーディネーターが、県の特産物の販路拡大に日夜奮闘している。愛媛県といえば、かんきつ類の生産は全国有数、キウイの生産も日本一、特に中身の赤い「レインボーキウイ」は糖度も高く、皇室納入実績もある。また鶏肉も日本一で、第三セクター工場加工された「熟成鶏肉」は首都圏での販売チャンスあり。小生担当の水産関連では、養殖真鯛・シマアジ・太刀魚・真珠・削り節等の生産が日本一であり、特に真鯛は「県魚」にもなっている。

小生が現在取り組んでいる販路拡大策を次に挙げる。

- ① 従来の市場経由取引をできる限り市場外流通に切り替え、関連経費を削減しスーパー・居酒屋・すし店・外食向け等への直取引の推進。
- ② 国や県の補助金等をできる限り活用、産地加工し、付加価値をつけ首都圏へ出荷。
- ③ 首都圏では連日デパ地下等で全国物産展、うまいもの展等開催されており、このようなイベントへできる限り出展させる。

県魚の真鯛について一言、生産は日本一で年間5万トン、ただし刺し身や煮物で食べられる可食部分は、わずか3分の1の1.7万トン、残り3.3万トンの頭・骨・内臓は残滓処

分されている。この3.3万トンを何とか食用向けとして再利用できないか、支援企業の1社が長年研究を続けてきたが、今般「真鯛粉末」の製造に成功した。この粉末には多量のカルシウム・コラーゲン・DHA・EPA等が含まれており、今後いかに「商品化」できるかが課題。真鯛粉末の商品化に成功すれば、水産業界の「ノーベル賞」との評価もある。

現在、練製品やみそ・しょうゆ・パン・菓子等への副原料として、また、今後需要拡大が見込まれる介護食（やわらか食）向けとしての市場開拓も開始している。

県には未開拓の食品・食材がまだまだあり、このような事業をぜひ続けていただきたい。また、世界的な和食ブームで日本食材の輸出は急増、2015年度輸出額7,452億円。県には中小企業向けの「愛媛県HACCP」制度もあり、HACCP取得企業の製品であれば、今後は国内向けのみならず、輸出向けとしても大いに成約のチャンスあり。

最後にABICを通して、現役時代に培った経験や知識を、地域活性化事業の中で「社会貢献」させて頂いていることに改めてお礼を申し上げたい。



愛媛県展示会で支援企業と
(右から2人目が筆者)



愛媛県展示会ブース



鮮魚の品ぞろえ

青森の食材を世界へ！

しまや 島谷 豊 (元 日本興業銀行)

2016年3月26日に東北新幹線は東京からわずか4時間で函館まで結ばれた。40年前に私が日本興業銀行仙台支店に赴任した時は、上野駅から青森駅までは約10時間の行程であった。それから30年後、興業銀行から転職した東京都の外郭団体は同僚全員が元商社マン。ABICへ入会するように勧められ自然に会員となった。いわば金融村から商社村への転身であった。

2年後に当外郭団体を辞めた後、青森県でのお話をABICから頂いたのは62歳になったばかりの頃。応募者がなかなかいないとお誘いであったが、県産品を海外に売るとい話は元銀行員としてかなり躊躇した。しかし私にとり青森は大学卒業後担当した思い出深い土地。その後勤務で海外を転々としても時折リンゴの白い花と岩木山を思い浮かべていたほどの青森好き。青森への恩返しの意味も込めて応募した。

運よく採用試験に合格したが、次にはリンゴ・海産物等の加工品を東南アジア中心に海外へ輸出促進するという、ハードルの高いミッションが待ち構えていた。幸いなことに、素人の私を見かねた県をはじめ周囲の津軽の人たちが非常に協力的であったことや、県全体で力を入れてきたリンゴやホタテ等が台湾を中心に東南アジアに浸透しており、既に高品質・安全な「AOMORI」ブランドが確立していたことで県産品の売り込みも好意的に迎えられとともに、各国に進出している日系百貨店中心に青森県物産展開催を要請される等幸運にも恵まれた。

一方、新商品発掘のため津軽（ジュース等）、八戸（海産物）、陸奥湾内（ホタテ）各地域に生産者を訪問して面談し、生産規模、海外進出意欲、決済条件の希望等々市場調査を実施し、ノウハウを蓄積してきた。県の三方を囲む海から捕れる、バラエティーに富んだ海産物・県内各所に湧き出る名水で作る地酒・生産高日本一のカシスを使ったジャム等々、まだ世に出ていない逸品がたくさん青森には埋もれていると実感している。販路開拓は、既存のリンゴ販路を利用して売り込みに行くとともに、国内外の商談会への積極的参加やインターネッ

トで知った海外業者への電話での交渉等で幅広くセールス活動を展開。このため海外出張は1週間単位でほぼ1回/2ヵ月、国内出張も1回/月のペースでこなし、この間隙を縫って、席を置いている県物産協会の若手と県内企業を訪問する等かなりハードにかつ楽しく飛び回っている。

この結果、シンガポールへ地酒・リンゴジュース、台湾へサバの甘露煮、香港へ干しホタテ等で実績が出始めている。これらの動きは東南アジアにとどまらず華僑の進出著しいカナダの諸都市からもリンゴジュース等の注文があり、華僑の動きと共に県産品が世界中に出荷され始めている。今後は県産品同士を結び付けた商品開発・対象国の拡大により、「AOMORI」ブランドの一層の浸透に寄与していきたいと考えている。

雪は深いものの、梅雨のない豊かな自然に恵まれた青森は一年中楽しみがある。夜な夜な地元の名物おばさんの酒場で同年代の単身赴任者・地元の連中と怪気炎。週末は秘湯温泉への日帰り入浴のはしご、八甲田山登山。冬場は大間のマグロや神田いせ源御用達の風間浦産あんこう鍋を堪能し、時たま弘前で津軽人と飲み歩くという至って健康的な生活をエンジョイしている。このため東京の自宅へは約3時間の時間短縮となったものの逆に足は遠のくばかり。四季折々の変化をめでながら青森での生活を堪能している。



台湾百貨店での青森催事風景
左端が筆者



シンガポールでの青森県産品
プロモーション（明治屋）左が筆者



事務所から見た津軽海峡冬景色

教育

東京外国語大学「社会・国際貢献情報センター」と ABICの連携について

ICSICセンター長（日本経済新聞社客員、元 常務取締役）**和田 昌親**

東京外国語大学の「社会・国際貢献情報センター」は略称をICSICという。日本貿易会傘下の「国際社会貢献センター」はABICという。似たような名前だが、先輩格はABICの方である。しかも長年のさまざまな実績がある。

最初から「似ているな」とは思っていたが、当方は大学の組織、ABICは民間の組織で、狙いは異なる。創設した2年前は別々の役割を果たせばいいと漠然と考えていた。

しかし、道筋は違っても最終的な目標は同じ「社会貢献」である。ABICの多面的な活動を知るうちに、お互いに堅固な協力関係を築けないか、と考えるようになった。そして2,600人超の国際派ビジネスマンOBのパワーを求めるICSICと、社会貢献活動に大学ブランドを付加する効果を期待するABICの利害が一致し、正式な連携に発展した。

それが2014年秋の「社会・国際貢献に関する連携協力」に関する包括協定書の調印である。東京外大の立石学長ももろ手を挙げて賛成した。それを契機に1〜2か月に1回程度、定期的に会合を開きお互いの事業計画や懸案事項の情報交換が始まった。

具体的な活動で最も重要なのは、ABICが行っているグローバルスタディ支援の活動に、東京外大が協力すること。ABICは全国のSGH（スーパーグローバル・ハイスクール）などに講師を派遣しているが、東京外大がこれを後押しする。SGHからの出前講師の要請はさまざまなので、これに対して共同で対応する。東京外大にとっても、SGHの指定を受けた高校との接触は重要で、高校生の外語大受験を促す意味がある。

ICSICの活動を少し紹介すると――。発足は2013年12月。簡単に言えば、社会貢献や途上国に関する情報を多方

面から収集し、大学の「知」の分析を加えて内外に発信しようというのが狙いである。

東京外大は日本最古の語学系国立大学で、英語を含めて「27言語」に対応できる体制を整えている。この学内環境を生かして「社会貢献」と「途上国」の情報ハブ機能を果たそうというものだ。

最近は日本の大学のほとんどが国際化、グローバル化を前面に押し出してイメージアップを図っている。このため国際化の「本家」である東京外大は他大学にない特徴を打ち出す必要がある。文科省が選定したSGU（スーパーグローバル大学）にも選ばれており、これを機に世界言語や情勢分析をさらに強化しようとしている。

ICSICの発足はその方向に沿ったもので、すでに途上国専門家による「地域講演会」（原則無料）を何度も開催している。これまで中米エルサルバドル支援、ウクライナ危機とロシア、インド・ビジネス、アフリカ・タンザニアの現状、シリア危機と中東、国連の新しい役割、クウェートの女性たち――などタイムリーなテーマを設定し、好評を得ている。ICSIC主催の「地域講演会」にはABIC会員にも情報を流し、多くの会員に参加していただいた。併せてICSICは国際貢献に関する見学会などの各種イベント（対象は学生および一般人）も仕掛けている。

「社会貢献」が今ほど重要視される時代はない。世界ではマイクロソフトのビル・ゲイツ氏、フェイスブックのザッカーバーグ氏ら有名経営者が巨額の資産を社会貢献のために投じている。ICSICもABICと共にそうした流れに乗っていきたい。



講演会「シリア危機とロシア介入」（2015年12月8日）



東京湾監視船の見学会

教育

14年目を迎える国際社会貢献センターによる 大学講義「グローバル経済Ⅰ・Ⅱ」

創価大学経済学部教授 ^{たかぎ いさお} 高木 功

本学において、国際社会貢献センターによる講義が初めて開設されたのが2003年。以来この春で14年目を迎える。もうそんなになるのかと驚くばかりである。ABICの大学講義の案内が届き、担当の方に直接大学までご足労いただき、初めてABICについてお話をお聞きした。日本の戦後復興、成長期において資源なき日本経済を支えてこられた総合商社のまさに「経済戦士」の体験を学生に聞かせたいと思い、お願いすることになった。当時学部長補佐であり、専門も世界経済、途上国経済であった私がコーディネーターを担当することになった。科目開設以来、多くのABICの講師の方々にお世話になった。感謝の気持ちとともに、担当の先生方の顔が思い出される。

本講義は当初、「経済特論B」として、新カリキュラムでは、「世界経済事情Ⅰ・Ⅱ」として、さらに2015年から「グローバル経済」と改称し講義が行われてきた。毎年、前・後期合わせて2百数十人が参加する。したがって受講学生の累計は2,500人ほどに上ろう。1年次にミクロ、マクロ経済学を学んだばかりの学生にとって、具体的な世界経済の現状と課題を学ぶ本講義は、世界と現実に視野を広げる好機となる。前期には世界経済と日本経済、資源、エネルギー、食糧、環境、NPO等、世界経済の主体、仕組みに関わる地域横断的な多様な課題について学び、後期には、中国、インド、ブラジル、ロシア等の新興経済地域とEU、中東等の地域別の経済と生活を学ぶよう工夫されている。1人の講師について連続で2回担当をお願いしている。講師にとっては1回目の講義の後、学生からの質問等の反応を受け、2回目につなげ、締めくくることが可能となり、受講生にとっても授業の理解と学習の成果を確認すること

ができる。

オムニバス形式の講義においては、一般に学生と教員とのコミュニケーションの実現は難しい。本講義では、ABICの講師の方々に毎回の授業の予習課題として、キーワード調べ、あるいは問題を課してもらい、学生は学修ポータルシステムを用いて、回答、提出し、講義に参加する。また授業終了後、学生による講義アンケートを実施している。内容の理解、共感に関して5段階で評価し、また授業で学んだこと、感想、質問等、毎回web上で記述することが求められている。次回の講義のために講師の方にそのまま、アンケートの結果をお知らせしている。おそらく、講師の先生方にとって学生の反応は新鮮であろうし、意外なこともある——聴いていないようで、しっかり聴いたり、あるいは思ったより共感を得たりと。

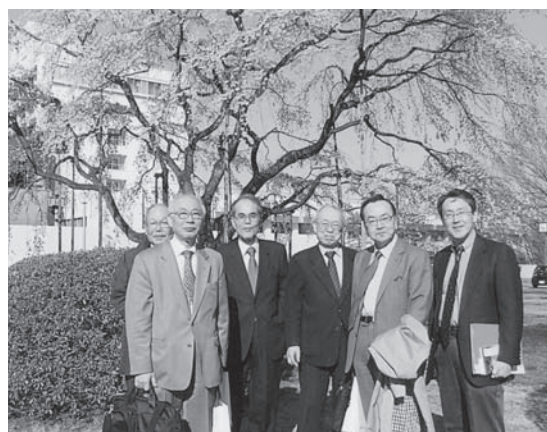
近年、大学の教育課題として、学生の主体的な学びをいかにして実現するかが問われている。本講義でも、いわゆるアクティブ・ラーニングを導入しようとして試みている。講師の方には、学生相互のディスカッションと討論の成果に対する講師からのフィードバックの時間を設けてもらうようお願いしている。果たして講義はさらに活性化するか。これからの課題である。

今年（2016年）もABICの講師の方々のご指導とお力添えをいただき、ともに日本の、世界の経済社会を担う次世代の人材育成に取り組んでまいりたいと思う。

なお本講義のティーチング・アシスタントの大学院生サハデブさん（ネパール）が2014年の第10回日本貿易会懸賞論文で大賞を受賞したことを本講義の成果の一つとして記しておきたい。



最終回のまとめの講義をする筆者



ABIC会員講師との打合せ会で、右端が筆者

教育

高等学校における国際理解教育

たちばな ひろし
橋 弘志 (関西デスクコーディネーター、元 三井物産)

ABIC会員による国際理解教育、キャリア教育のための講演、授業依頼が幾つかの兵庫県立高等学校から寄せられ、2015年11月から12月にかけて実施した。ここでは、その概略を紹介する。

まず、2015年11月9日に須磨東高等学校で「グローバル語り部」授業の一環として、実社会で活躍するさまざまな専門職の方々が1年生の幾つかのクラスで同時並行的に授業を進める形で行われた。当日は社会保険労務士、薬剤師、弁理士、行政書士の方々に加え、ABICからは田岡会員が「国際金融」をテーマに授業を行った。この授業は生徒に今後の進路を考えてもらう「キャリア教育」の側面を持ち、田岡会員は、自身の高校から大学への進路決定と就職の経緯、その後、キャリアアップを目指し転職した外国銀行の日本支店での仕事や国際金融ビジネスにも触れながら生徒に語り掛けた。同校は総合的な学習の時間にリーガルマインド基礎と題する課題解決型の学習を行っており、社会を知り、考える人材を育成するキャリア教育の一環として今回の授業を行ったもの。

次に12月15日にスーパーサイエンスハイスクール指定校の尼崎小田高等学校で、ABIC隅谷会員が多民族国家シンガポールを例として、異なった民族が互いの人権に配慮しながら共存する社会について、全校生徒800人余りを前に講演した。歴史、文化、宗教を異にする多民族国家で、近年、日本のGDPを上回るまでに成長したアジアの先進国、シンガポールの実態を映像や音声を使いながら、多面的な解説を行った。多民族が共存してゆくために、国民生活の細部にまで厳しいルールを課し、罰則を設ける特異な国情は、生徒の大きな関心を引いた。

続いて12月17日にはスーパーグローバルハイスクール

アソシエイト校である、朝来市の生野高等学校で「グローバル語り部」授業の一環として、1、2年生を対象にABIC鈴木会員が講演を行った。自身の進路選択で考えた事、さまざまな事を思い知らされたスリリングな学生時代の米国単独旅行体験、外国銀行の日本支店での勤務経験から、文化の違いを理解すること、コミュニケーション能力の重要性、分かったふりをしない素直な態度が英語学習では大事であることなど、生徒との簡単な実技を交えながらの講演であった。将来、海外での仕事をを目指す生徒にとって興味を引くものであった。

12月22日には、相生高等学校で、ABIC寺田会員による「日本の実力と国際化」についての講演が全校生徒を対象に行われた。同校はグローバルな視点を持った「世界市民としての生き方、在り方」を考える機会を持つことを目的として国際理解講演会を毎年開催している。寺田会員は、終戦直後の荒廃した経済状態から、家電メーカー、自動車メーカーが苦労を重ねながら、世界のマーケットにビジネスを展開していった事例を分かりやすく解説し、さらに日本企業の優秀な電子部品や製品が現在も世界のさまざまな分野で高く評価されていることにも触れた。国際理解教育の側面と生徒の今後の進路選択への意欲を引き出す講演であったことが、授業後の生徒の感想から読み取ることができた。

ABIC会員による高校生を対象とする国際理解やキャリア形成のための授業は、2016年に入ってから、川西明峰高等学校、西脇高等学校で予定されており、ABIC関西デスクは会員とのコミュニケーション、講演、授業実績の評価を通じ、これからも適材を派遣し、高等学校からの要望に応えられるよう努めてゆく。



須磨東高等学校での田岡会員による授業風景



尼崎小田高等学校での隅谷会員による講演風景

世界に広がる生け花の輪

くわがた いさお
鋤形 勲 (留学生支援担当コーディネーター、元 伊藤忠商事)

1. 華道教室のあゆみ

ABICの留学生支援活動の一つとしての華道教室につき、経緯と最近の状況をご報告申し上げます。同教室は2002年に第1回の教室を開き、草月流の中西講師に指導いただき、その後古流の藤原講師とご息女に教授いただいた。2008年に新たに小原流本部に講師派遣をお願いし、小山田講師と鴨志田講師を派遣いただき現在に至っている。なおこの間のコーディネーターは山田および厚浦が尽力した。

2. 教室で学ぶこと

華道には流派により生け方の約束事があり、まずその習得から始まる。小原流の場合は水盤と剣山を使い(草花を)「たてるかたち」に生けることから始める。芯としてたてる枝は長さや角度が決まっている。その後「かたむけるかたち」や「まわるかたち」などいろいろな型を習得する。しかしただ決められた型をまねるだけではない。最も初歩的な段階であっても「決められた手法」と同時に「生ける人の自由で闊達な発想や審美眼の発揮」が必要とされる。伝統的な型と自由で時には奔放なシュルレアリスムのフォルムの融合がこの派の面白さと思われる。われわれがホテルの玄関で見かける西洋式の花の展示は、空間を残さず花を容器に埋め込んであふれるばかりの豪華さに満ちており、バロックやロココ建築のようである。またその花の集合体の中には主役となる花があり周りは主役の引き立て役となっている。一方生け花は右と左への相似形の展開がなく空間が多いので一見「もの寂しい」印象を受ける。多くの流派において「左右対称ではないこと」と「余分な要素をそぎ落とし本質のみを残すこと」すなわち「引き算の美」を審美の基準に置いているものと思われる。空間を埋め尽くし征服するのではなく、空間も大事な美の要素と見なし、

一本の花や小枝も大事な主役であるという審美感こそが生け花、ひいては「自然や他人との共生」を願う日本人の考えではないかと思える。他人を圧倒する主張や表現には他人の領域にまで入り込むが、より静的で自省的な日本人特有の思想の発露を、外国人のたちが生け花の中に垣間見てもらいたいと思う。

教室では講師の厚意により、年に数回華道展示会に生徒を招待している。これは他流派の生け方を含め幅広く生け花を理解してほしいとの願いからである。

3. 許状 (Certificates) が取得できること

ABICの華道教室では継続的に参加し単位を修めた受講者は初等科の許状を取得している。2015年末までに許状を取得した生徒は14人で国籍は8カ国に及んでいる。

4. 生け花の輪を作ろう

2002年の第1回教室から2015年12月までに月例教室に参加した生徒数は1,150人となり、毎年開催される東京国際交流館主催の国際交流フェスティバルでは、茶道、書道と共に開く体験教室の華道も年々増加し2015年は125人となった。また2015年6月より兵庫国際交流会館でもABICの華道教室を開始し、東京と同じく小原流から細坪講師を派遣していただいている。

最近、かつて交流館に滞在し許状を取得した受講生から、「南国なので花はたくさん自生していて材料費はかからない」「菊や桔梗が手に入らない」等の便りをもらっている。ABICの華道教室を体験した留学生たちが故国に戻り、日本で学んだ生け花を近隣の人たちに伝えてくれている。まだ数は限られているが、これからも生け花の種を世界の各地でまいてくれる人が増え、やがて生け花の輪ができることを願っている。



月例華道教室の参加者



国際交流フェスティバル華道体験教室
 小山田講師と和装の米国人アシスタント



国際交流フェスティバル
 華道体験教室の鴨志田講師

エッセー

笑いヨガを働く人々へ

あら お のりみち
荒尾 紀倫 (元 日商岩井)

笑いヨガは、インドの内科医であるDr. Madan Katariaが1995年に考案したもので、無邪気な笑いヨガの呼吸法を組み合わせた一種の体操です。落語や漫才などのユーモアに頼らず、笑う理由がなくても誰でも笑うことができます。いろんな仕草をしながらグループの他のメンバーと目を合わせ、無邪気な遊び心で作り笑いをしますと、すぐに本当の笑いになり、皆に伝染していきます。

人の身体は、作り笑いと本当の笑いの区別がつかず、どちらの笑いも健康増進に役立つことが医学的に証明されており、欧米や日本を含む100カ国以上の国々で楽しまれています。

笑いヨガは、上述の笑いヨガ体操と笑い瞑想（ただ笑うだけの瞑想+クールダウン）から成っていますが、笑い瞑想とヨガ呼吸瞑想を組み合わせたものが、笑いヨガ瞑想です。

私は、笑いヨガ体操を行うと同時に、Dr. MKの「笑いヨガ 笑うのに理由はいらぬ」と「笑いヨガのスピリット」を研究し、毎朝30分間笑いヨガ瞑想もやってきました。その結果、自分の嫌な性格（先ず、自分で失敗すると自分を責めていつまでも不愉快な気分になり、さらに、人がちゃんとやらないとすぐいらぬ、怒鳴ったりすること）が出なくなってきたばかりでなく、集中力も高まり、毎朝やっているヨガの「立木（足一本立ち）のポーズ」が何の支えもなしにできるようになりました。

笑いヨガは、フィットネスセンター、ヨガスタジオ、高齢者センター、学校、大学、心身障害者施設、がんの患者会などで普及しつつありますが、企業でも取り上げられつつあります。企業で注目されている理由は、下記の通りです。

(1) 職場のストレスを軽減する：職場では多くの方がストレスを抱え、才能や技術があっても感情的なバランスを失ったり、ストレスが高まったりすれば、十分に能力を発揮することができません。笑いヨガは、単純な体操で心身のストレスを軽減し、感情のバランスを取り戻すことができ、費用対効果ももっとも高い、短時間でできる体操です。

(2) 感情を安定させる：前向きな感情をもたらす、ネガティブな感情を軽減させることによって職場関係も円滑になり、仕事と生活のバランスもうまく取れるようになります。

(3) ピーク・パフォーマンスを高める：脳を含

む全身への酸素供給量を高め、能力を最大限発揮できるようになります。脳は、他の臓器に比べ、25%多くの酸素を必要としますが、笑いヨガで行う笑いと深呼吸がより多くの酸素を体内に取り込みます。ピーク・パフォーマンスを達成するためには、気分も非常に重要な要素ですが、笑いヨガは、エンドルフィンなどのホルモンを脳細胞から分泌させますので、瞬時に気分転換を行うことができます。

(4) 創造力を高める：笑いヨガの遊び心は、創造力の基礎となる右脳の活動を刺激しますので、新しいアイデアや考え方が生み出されやすくなります。

(5) チームワークを高める：笑いヨガは、人と人をつなぐことで、チームワークを強化し、コミュニケーション力を高め、従業員が互いに助け合って、積極的に支え合う職場環境をつくりあげるのに役立ちます。

このように笑いヨガは企業にとっても大きなメリットがありますので、厳しい労働環境下で働いておられる人々に笑いヨガを普及していきたいと考えています。私は、Dr. Madan Katariaから直接ティーチャーの認定を受け、2015年2月から地元自治会有志の依頼を受け、ボランティアで笑いヨガを月1回教えています。参加費用は、場所代として1人当たり30円です。関心のある方は下記にご連絡ください。

(Laughter Yoga UniversityのOur Star Authorsに選ばれ、私のブログがhttp://laughteryoga.org/english/blog/blogger_info/11804に掲載されています)

開催場所：千葉市美浜区高浜5丁目自治会集会所
関連Website：

<http://laughteryoga.jp/club/detail.php?id=594>

Eメール：araonorimichi@gmail.com

電話：043-277-8583



Dr. Madan Kataria (右端)、筆者 (右から2人目)

エッセー

スペイン・奈良の弓道交流

まつお けんじ 松尾 謙二 (関西デスクコーディネーター、元 伊藤忠商事)

2015年11月初め、奈良県の弓道の先生方のお供をしてスペインに行ってきた。(3人の先生と、私を含む4人のお供：総勢7人のグループ。ちなみに私の弓道暦は学生時代の4年間と2012年春に現役を退いてからの3年強の都合7年で、本来私などに声がかかるものではなかったのだが、たまたまアルゼンチン駐在でスペイン語をしゃべったことがあるということでお誘いがあったもの)

このスペイン行きはスペインで弓道を愛好する人たちに先生が指導をされるためのもので、この交流は今回で3年目となった。きっかけは日本に長期滞在されていた弓道愛好の人がスペインに戻り、同国の連盟会長になられた。スペインの弓道レベルをもっと高めたいと考え、日本で指導を受けた先生方にスペインを訪問し指導してほしいと要請、それが3年前に実現したもの。一昨年(2014年)は逆にスペインから12人の愛好家が来日し、ほぼ1週間にわたり奈良県内の4つの弓道場で指導を受けた。今回は再度日本からの遠征になったものである。(本交流は日本側はあくまでプライベートベースであり、弓道連盟の行事ではない)

11月5日(木) 昼過ぎに関西空港を出発、アムステルダム、バルセロナ経由で研修地の地中海に浮かぶマヨルカ島に着いたのは現地時間の夜10時、時差8時間を加算すれば合計17時間余りの長旅であった。翌日は休養を兼ねてホテルに近いカテドラル、市街地等の見学や散策。研修は土曜、日曜の2日間である。

7日(土) 朝、研修の場の体育館に到着。すでに50人余りが集合していた。スペイン全土での弓道人口は100人余りであるので、その半数近くが全国各地より参集したことになる。中には遠く大西洋の北アフリカ西部カナリア諸島から駆け付けた参加者もあった。弓道を愛する気持ちが強く感じられた。

彼らの日頃の練習は日本のような弓道場がないため、その都度体育館を借りて仮設道場を設営しなければならない。中には田舎に住んでいて、自分の広い畑

の中に的を置いた露天道場を持つ人もいて、研修終了後そこに招待された。仕事現役のメンバーが大多数であるため、練習は日曜日の週1回と厳しい。その分練習には非常に真剣に取り組んでおられると感じた。

なぜ弓道を始めたか?の質問に日本に興味を持った、なかんずく武道に興味を持ち、弓道を選んだと言う。開始後間もない人から弓道暦10年以上の人もある。

研修の目的は「体配」(弓を引くに当たり求められる立ち振る舞い)と「射技」(弓を引く技術)の向上を目指すことにある。日本からの先生方による「矢渡し」(競技、研修等のイベント開始時の模範演武)により研修会が開始、その後研修会参加者全員が現在自分の持つ技量で射技を行い、先生方が研修生1人ずつの実技につきメモされ、それを元にその後の個別指導に当たられた。一部通訳担当が通訳するが、弓道に使われる専門言葉は一般的に日本語のまま、スペインの人たちもその内容をほぼ理解している。初日は夜8時までの6時間余りを個別指導に、翌日は段位毎に求められる体配の研修と射技の研修を受けた。

聞いたところによれば、ヨーロッパでは弓道を始めるにあたり射技より先ず体配から教わるとのことで、姿勢やその他動作はわれわれ日本人が逆に見習うべき点多々あったように見受けられる。

体育館の使用時間制限のため午後1時に終了を余儀なくされた。研修終了後の先生方の評価は、研修会開始時に比べ終了時は全員相当なレベルの向上が見られたとのことであった。

初日の研修後、参加者全員での食事会による交流会は夜9時半頃開始…これがスペインだ。われわれ日本人は11時過ぎに退散、現地の人たちは何時までだべっていたのだろうか。1日半の研修を終え、来年も再会しましょうと約束をする姿があちこちで見られた。その後3日間ほど、一行7人はマヨルカ島とバルセロナをそれぞれの出身地の愛好家の案内で観光を楽しんだ。



体育館弓道場



筆者(一番手前)も研修に参加



マヨルカ島観光(左端が筆者)

会員の種類

| 種類 | 内容 | 年会費 | | |
|------|---|--------|----|---------|
| 正会員 | センターの活動を推進する個人、法人及び団体。 (理事会の承認を得て入会) | 法人及び団体 | 1口 | 50,000円 |
| | | 個人 | 1口 | 10,000円 |
| 賛助会員 | センターの趣旨に賛同し、会費を納める活動会員、並びに個人、法人及び団体。 | 法人及び団体 | 1口 | 10,000円 |
| | | 個人 | 1口 | 5,000円 |
| 活動会員 | センターに登録し、センターの事業に参加しようとする個人。 | 不要 | — | — |

正会員

団体・法人（17社）〈社名五十音順〉

〈10口〉（一社）日本貿易会 伊藤忠商事(株) 住友商事(株) 双日(株) 豊田通商(株) 丸紅(株) 三井物産(株) 三菱商事(株)

〈4口〉 (株)日立ハイテクノロジーズ 〈2口〉 稲畑産業(株) 岩谷産業(株) 長瀬産業(株) 阪和興業(株)

〈1口〉 兼松(株) 興和(株) JFE商事(株) 蝶理(株)

個人（11名）〈入会順・敬称略〉

池上 久雄 寺島 實郎 小島 順彦 宮原 賢次 吉田 靖男 岡 素之
佐々木 幹夫 勝俣 宣夫〈3口〉 小林 栄三 槍田 松瑩〈3口〉 市村 泰男

賛助会員

法人（5社）〈社名五十音順〉

(有)イーコマース研究所 (株)エックス・エヌ 協同木材貿易(株) (一社)国際行政書士機構 NPO法人賛否両論〈3口〉

個人（403名）

下記は2015年11月以降にお申し込み頂いた方です。ご協力に深謝申し上げます。(敬称略・氏名五十音順)

〈1口〉 鹿志村 馨 下島 泉 中村 彰秀

活動会員 2,659名

(2016年2月末現在)

賛助会員入会のお願い

ABICの活動にご賛同いただき、資金的な援助をしていただける活動会員及びその他の個人の方、並びに法人及び団体の皆様のご入会をお願い申し上げます。

会員入会のお問い合わせ・連絡先

特定非営利活動法人 国際社会貢献センター (ABIC)

〒105-6123 東京都港区浜松町2-4-1 世界貿易センタービル23F

TEL : 03-3435-5973 FAX : 03-3435-5970 E-mail : mail@abic.or.jp